

## 短 信 (四)

倉 橋 惣 三

### 保母の修養といふ題について思ふこと

保母の修養といふことが、此の秋の關西聯合保育總會の談話題の中にあつたことを聞いた。先づ、出題者のゆかしさに敬意を表する。總會の席上でも、澤山の有益な發表があつたこと、信するが、此の機會、私も思ふことを述べて蛇足を添へたい。

一、誰れの修養にも二つの途がある。一つは、平生の忙しい仕事そのことのなかでする修養、一つは仕事の外に、我れといふものを凝めてする修養。前の方を生活修養、後の方を凝念修養ともいへようか。さて普通に修養といへば、多くは凝念修養の方をいふようであるが、生活修養も亦、大切であり貴重である。つまり、平生従事してゐる仕事そのことから與へられる修養である。農夫は耕作することによつて、畫家は創作することによつて、學生は修學することによつて、教師は教育することによつて——いづれも、その仕事々の三昧境に身を打ち込むことによつて、識らぬ間に出來てゆく修養である。それ

も、仕事の種類、内容から與へられる教へではなくて、仕事への精進そのもので出来てゆく修養である。此の意味で、保姆の修養は、子どもの中に眞に自分を投げ込み、獻げつくすことにあるといふことになる。子どもを離れて保姆はないからである。之れを言ひかへれば、保姆の修養の道場は、幼稚園託兒所そのものにあるといふことがいへる。保姆諸君、幼稚園託兒所で救はれないで、あなたは、どこで救はれるか。

二、しかし、そうはいふものゝ、我れを我れとして抜き出して凝めたいのも、人間らしい一つの要求であり、眞摯な行ぎょうである。省みのない生活は、自分として危いからである。ところで、此の凝念の修養には、我れを視る正しい目がある。我れを省察する高い標準がある。我れを勵ます強い力がある。我れを、あるがまゝには置き得ざらしめる引き上げの望みがある。即ち、我れを凝むる助けがあるのである。つまり、我れが、つまらない我れと、いつまで、にらみつくらをしてゐてもつまらないからである。ところで、此の、正しさと、高さと、強さと、殊に引き上げの望みとを一番よく併せ具へるものとして人間の持つてゐる最上の文化は宗教である。そこで、すべての凝念修養の究極境は宗教へゆくのではあるまいか。素より、信仰といふことは容易のことでない。又、いろ／＼の意味にも解せられることである。しかし、せめては、宗教を求めるころ、宗教のそばへゆくつとめ。その一歩としては、少くも、人間の中にある宗教の大きい力を知ること、感ずること。そうして、小さい自分を、その大きなものゝ前に置いて見ることに、その助けで自分を凝めること。……………

斯う書いて来て、私は、ふと思つた。子ども達はあなたのをそばに寄つて来る。あなたは、何のをそばに寄つてゐるか。あなたも、何かにたよらないで、あの子ども達のたよつて来るのを受けられますかと。